The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	知的障害者にとっての居場所と地域コミュニティ：フィリピン農村部のある事例から
Author(s)	寺村, 晃
Citation	未来共創. 2020, 7, p. 119-134
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/76152
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

論文

知的障害者にとっての居場所と地域コミュニティ
フィリピン農村部のある事例から

寺村 晃

要旨

本稿では、人的・制度的・物理的な社会資源が限られているフィリピン農村部にある支援施設バビタハウスを利用する成人知的障害者の多彩な活動を述べる。特に、メンバー同士や地域住民、支援者との交流からソーシャル･インクルージョンを考察していく。

当施設の主な理念は、①当事者の居場所作り、②当事者は共同運営者、③地域コミュニティの架け橋である。30 歳代の５名の知的障害者が頻繁に利用している。主な活動は調理、洗濯、掃除、学習課題、農業や家畜の世話、地域のスポーツ大会、物品販売活動、地域住民を招いたイベント開催と多岐にわたる。

フィールドワークの結果として、①メンバーにとって、共通の仲間と、共通の時間を、共通の場所で安心して活動に取り組める施設であった、②施設内において、支援者が過度の介入を行わず、メンバー同士が互いに支えあいながら活動を展開していた、③メンバーや地域住民との関わりの中で、メンバーは新たなアイデアを持ち、地域コミュニティのなかで活動を展開していたということが分かった。また、「障害は人間関係の希薄さによって顕在化する」とバビタハウスの支援者は述べている。これらを踏まえて、ソーシャル・インクルージョンを考えるうえで、当事者が地域コミュニティの受動的な構成員に留まらず、自発的な構成員へと移り変わっていくことが肝要である。

目次

1. はじめに
- 1.1. サービスの受け手としての障害当事者
- 1.2. フィリピンの知的障害者を取り巻く現状

2. フィリピンの知的障害者の調査
- 2.1. 研究対象施設の紹介
- 2.2. 対象者と方法

3. 事例紹介
- 3.1. 対象者の基本情報
- 3.2. メンバー発進で行う活動
- 3.3. 事例 1）当事者と地域住民の橋渡しをするリーダー格の当事者 J 氏
- 3.4. 事例 2）ある時は支えられ、ある時は支える当事者 M 氏
- 3.5. 事例 3）新しい役割を見つけた当事者 A 氏

4. バビタハウスという小さな拠り所の価値
- 4.1. いつでも集まれる居場所
- 4.2. 活動の中で変容する役割
- 4.3. バビタハウスという居場所から地域コミュニティへ

5. おわりに

キーワード

フィリピン
知的障害者
地域コミュニティ
ソーシャル・インクルージョン

大阪大学大学院人間科学研究科地域創生論；teramuraakira@gmail.com

1. はじめに

1.1. サービスの受け手としての障害当事者

筆者はリハビリの専門職である作業療法士として、リハビリテーションセンター、訪問リハビリ、放課後等デイサービスなどで、10年以上に渡って国内外の障害者支援に携わってきた。医療福祉の現場では、障害者のことを「ケース」という表現を用いることがしばしばあり、「支援者」と「ケース」という二項対立関係になることがある。つまり、そこには治療介入する者とサービスを受ける利用者と言う決定的な線引きがなされ、サービスが提供される。

向谷地（2006）は医療福祉の現場について、「“囲学＝囲い込みの医学”、“管”護＝管理の看護、“服”祉＝服従の福祉」があり、過剰なケアや過剰な援助の常態化により当事者の力を無視し生きる力を奪ってきたと述べている。同様に、松井（1977）は、福祉職がケースに対して機械的に振る舞い、支配し、管理すべき対象として介入することの危険性を指摘しており、当事者の独自性を無視した関わりを危惧する論調で福祉哲学の観点から考察している。つまり、医療や福祉の枠組みのなかで、「利用者・サービス利用者＝保護すべき弱い障害者」とラベル化し、知識や技術を持っている支援者が主体となり、障害者がサービスの受身の存在となっていた。

こういった背景に対して、田中（2004）はさらに議論を進め、利用者を師とし学ぶことで、人間とは何か、生きるとは何かを捉え直す機会になることを提唱している。そして近年、支援者と利用者の対立関係ではなく、対等な関係を築くように見直しされている。しかし、実際の現場では、依然として主体的な支援者により、障害者は受身となり、彼らの強みを引き出すことが難しい時がある。結果的に、障害者の活動は医療福祉の枠組みから出ることが難しく、限られた社会参加となっていると言わざるを得ない。

近年、障害当事者の社会参加の捉え方として、ソーシャル・インクルージョンの概念が注目されている。元来、ソーシャル・インクルージョンは政策用語として用いられていたが、社会の在り方を指すことが多く、我が国において議論が盛んになっている。とくに、浜村（2014）は地域福祉の分野では、差異や多様性を認め合う住民相互の連帯、心の繋がりとそのためのシステムが

不可欠であり、障害者などの社会的弱者を排除するのではなく、地域社会への参加を促し社会に統合する『共に生きる社会づくり（ソーシャル・インクルージョン）』という視点が重要であると整理している。

一方で、社会資源などあらゆる面で先進国と異なる開発途上国で暮らす障害者の実践的な事例報告は限られている。特に、被援助者という枠組みにとらわれずに、他の当事者や地域住民との関わりに着目した開発途上国における固有事例の集積は、新たな知見として重要である。そこで、本稿ではフィリピン、ボホール州農村部にある支援施設での筆者のフィールド調査で得た知見の中から、成人知的障害者の役割、および他の当事者や地域住民との交流について着目し、地域社会へのソーシャル・インクルージョンの可能性について考察する。

1.2. フィリピンの知的障害者を取り巻く現状

開発途上国に居住している障害者はどのような状況に置かれているのだろうか。WHO（2011）によると、世界人口の約15%にあたる約10億人が障害者であり、その約8割が開発途上国に住んでいると推計されている。開発途上国に居住する障害者の置かれている状況は極めて厳しい。JICAの報告（2015）では、障害者が医療福祉サービスを受けることが困難な理由として、医療福祉従事者の不足、周辺の人々の否定的な態度、政策の不備、不十分な財政、交通手段の欠如、支援機器の不足といった劣悪な制度的・人的・物理的環境のため、障害者は医療福祉サービスを受けることが難しいと述べられている。とくに、農村部ではこういった環境が顕著である。このような問題を有している開発途上国において、医療福祉従事者の限られた活動に着目するのではなく、当事者活動やNPO活動といった実践の現場から生まれた問題解決方法に着目する必要がある。

開発途上国に位置付けられているフィリピンには、約144万人の障害者（2010）がいて、全障害者の約７％は知的障害者（2000）であると国勢調査で記されている。フィリピンは開発途上国の中では、障害者法制度は早い時期から整備が進んだと言われていて、2009年までに障害者に関する法律は26法と非常に多い。しかし、森（2010）は障害者関連法が多く整備されているから

といって、フィリピンで障害者の社会参加が進んでいるとは言い難いと指摘している。その理由として、障害者統計の不十分さや医療福祉の財源が充分に確保されていないこと、障害者に関する法律の認知度の低さ、障害児教育の包括的法律が存在しないこと、中央政府の障害者雇用率の低さなど挙げている。筆者が障害者政策で最も有名な政策である「障害者のマグナカルタ」についてフィリピンの医療福祉従事者に尋ねた際、「法律は寝ている（the law is sleeping）」と揶揄する場面が多々あった。

これらのことから、フィリピンの障害者の社会参加の場は極めて限られている。とくに、身体障害者と比較して、知的障害者は認知機能やコミュニケーション面に障害を呈しやすく、周囲から理解されがたいこともある。そして、特別支援学校を卒業した知的障害者は就労に就くことは困難なことが多い。結果的に、成人期の知的障害者は自宅を中心とした狭い生活範囲となり、活動の場が限られ対人交流の機会が激減することが多い。

2. フィリピンの知的障害者の調査

2.1. 研究対象施設の紹介

対象施設は、フィリピン中部のボホール州ダウィス市タバロン地域にあるNPO法人ボホール－日本知的障害者協会が運営するバビタハウス（以下、ハウス）である。同地域は、人口は7,031人（2015）で、農業や漁業といった一次産業が中心であり、市街地までバスで20分程度かかる。

設立のきっかけは、NPOの代表者である元JICA海外協力隊の杉山明子氏が2012年～ 2015年に同州にある特別支援学校で活動したことにある。同州の障害児は比較的教育を受ける機会があり、成人の視聴覚障害などの身体障害者は企業や支援団体がすでに介入していた。一方で、知的障害者は、自宅で生活することが多い現状があり、これを問題視した杉山氏が知的障害者の活動の場を提供するために2016年に同施設を開いた。

ハウスの主たる理念は、「当事者の居場所になる、当事者と共同運営する、地域コミュニティの架け橋になる」である。同国において、身体障害者を中心とした施設は多くあるものの、成人の知的障害者に焦点を当てた施設は非常

に珍しい。メンバーはいつでもハウスに出入りすることができ、また、地域住民との交流が積極的に行われている。

ハウスは杉山氏の自宅を兼ねており、地域住民との心理的障壁を作らないために、生活インフラも農村部の一般家庭と同等にしていて、施設には塀はなくガスもなく断水は頻繁に起こる。登録している7名の知的障害者は自宅から通ってくることもあればハウスに宿泊することもある。施設の主な活動内容は、調理、洗濯、掃除、農業、工作、動物の世話、学習課題、誕生日会、屋外活動、地域の清掃活動、衣類や文具などの物品販売活動、スポーツ大会への参加、訪問客の対応など多岐にわたる。日々の活動は午前に学習課題、午後に工作と概ね決まっているものの、当事者のやりたいことや当事者同士の掛け合い、支援者との冗談の中で決まることの方が多い。例えば、調理のための薪割や鶏小屋の修繕や野菜の収穫、訪問客を連れての海水浴など、その時に活動が決まる。こうした活動を通して、生活動作の向上や余暇活動の開発、対人交流技能の向上などを目的としている。なお、利用するためには、5ペソ（10円）を支払うかメンバーが無理なく入手できる薪や果物などの物品を寄付する、もしくは施設内の手伝いに励むことになっている。

2.2. 対象者と方法

研究対象者は、施設に宿泊した経験があり、2年以上の利用歴があり、直近6か月継続的に活動に参加した知的障害を有する当事者5名とした。登録者全7名中2名は、体調不良や用事が頻繁に続いたため、除外した。なお、性別、年齢は問わないこととした。

方法として、対象者の寝食を含む全ての活動を共にする参加型参与観察を用いた。その理由として、活動の解釈や意味づけをできるだけ自然な形で観察するためである。また、筆者がメンバーと共に活動に参加することによって、過度の注意を引いてしまわないように、適宜、支援者と相談し、配慮した。また、情報を補完するために、対象者のみならず、家族、地域住民、支援者、特別支援学校の教員といった関係者へ聞き取り調査を行った。対象者の基本情報として、性別、年齢、知的障害の程度、合併症、日常生活動作（ADL）、基本的な移動手段、利用状況を支援者から聴取した。

調査期間は2018年3月、8月、2019年3月、8月で計4回のフィールドワークを実施した。データ分析方法はフィールドノートおよび聞き取り調査で得られた内容を構造的に整理し、当事者の活動の広がりや役割の変容、他の当事者および地域住民といった対人交流について調べ、インクルージョンの視点から考察を行った。なお、本研究の倫理審査は大阪大学人間科学研究科の倫理審査委員会の承認（承認番号OUKS1814）を得て実施した。

3. 事例紹介

3.1. 対象者の基本情報

対象者の基本情報を以下に記す。本稿で取り上げる対象者は、男性4名と女性1名であり、全員が30歳以上であった。知的障害以外にも、重複障害を呈している者もおり、移動手段に援助が必要な者もいた。ハウスを利用する頻度や時間帯は異なっており、当事者が好きな時間帯に来所することもあった（表1）。

表1. 対象者の基本情報

No.	氏名	性別	年齢	障害程度	合併症	ADL	バス	自転車	利用状況
1	J	男	32	極軽度	なし	自立	可能	可能	毎日、宿泊
2	M	女	30	重度	肢体不自由 言語障害	食事監視 屋外歩行介助	困難	困難	週２回来所
3	A	男	35	軽度～ 中等度	右目弱視 左目失明	自立	可能	可能	毎日、来所 イベント時 のみ宿泊
4	C	男	34	軽度～ 中等度	なし	自立	可能	可能	毎日、宿泊
5	R	男	35	極軽度	言語障害 巧緻動作低下	食事監視	可能	三輪自 転車	ほぼ毎日、 来所 イベント時 のみ宿泊

3.2. メンバー発進で行う活動

対象者の5名の特徴は、リーダー格のJ氏、メンバーが大好きなM氏、工作が好きなA氏、誰にでも優しいC氏、イタズラ好きなR氏であった。来所の動機について、物作りが好きだから来る、何か楽しい活動ができるから来る、他のメンバーや支援者に会うために来るといった発言がメンバーや家族からあった。

メンバー5名と支援者1名で、日々の遭遇したことや出来事を思いつくままに会話し、冗談交じりでの会話が続く。支援者が支配的に話題を誘導し、問題解決の近道を提示することはあまりない。また、地域住民との交流機会も頻繁にある。例えば、ハウスの設立イベントのために特別支援学校からマイクとスピーカーセットを借りてくると、メンバーのみで近隣宅に行き、一緒にカラオケを始め、お酒を飲んで深夜まで宴会をして楽しむこともあった。また、支援者が不在の時は、メンバーのみでハウスの留守番をすることも頻繁にあり、共同運営者として奮闘もしている。本稿では特徴的であった3名の事例について、詳細を述べる。

3.3. 事例 1）当事者と地域住民の橋渡しをするリーダー格の当事者J氏

J氏は極軽度の知的障害を呈しており、複雑かつ抽象的な会話になると困惑する様子を見せる。しかし、J氏は人当たりが良く朗らかな性格を持っており、常にメンバーに冗談を言うなどハウスの中心的な存在である。平日にはJ氏は特別支援学校の売店で仕事をしたあとハウスで寝泊まりし、週末にはハウスでメンバーと過ごす。

ハウス内では、工作や調理などの活動を率先して行うことが多く、他の当事者もつられて行動を始めることが多い。人に指示を与えるような指導者のような存在ではなく、縁の下の力持ちとなってハウスを盛り上げる。例えば、市街地から乗合バスに乗る際には、他のメンバーが座りやすい場所をJ氏が確保し、最後に狭い座席に座ることもあった。また、施設の壁を修繕するときには、支援者に状況を伝え、他のメンバーと協力して修繕することもあった。他のメンバーから慕われており、J氏が泊まっていたため、C氏とR氏が夜9時に来所することもあり、3名は談笑を始め、メンバーらは早朝6時に自宅へ

帰っていくこともあった。

地域活動において、クリスマス会や設立イベントを行うときは、J氏が筆頭になりメンバーで地域住民や特別支援学校の先生たちを招待する。また、J氏は司会を積極的に行い、メンバーや地域住民を巻き込みながらゲームやダンスを披露する。J氏は身体能力が高く、アジアの陸上大会でメダリストにもなっている。そのため、地域でバスケットやバレーを行う際には、地域の選手やコーチがJ氏に選手として声をかけてくることも多い。そして、2018年、地域のバスケット大会では、健常者に交じりJ氏が活躍し、見事3位になった。その後、祝勝会に参加するときには、J氏の親友であるC氏も呼び、ビーチで地域の青年たちとお酒を飲んだ（写真1）。地域住民の反応も極めて良好であり、地域住民にハウスについて尋ねると、必ずJ氏の話題になる。J氏の誕生日の際には、地域の婦人たちがケーキを用意し、ハウスにお祝いに来た。母親を亡くしているJ氏に向かって、「この地域には、たくさんのお母さんがいるね」と婦人たちが笑顔で祝言を述べ、J氏も満面の笑みになった。

写真1. バスケット大会後の宴会

ハウスに来所する目的を筆者がJ氏に尋ねると、支援者やハウスを守るためと答える。農村部と言う僻地に住む支援者を支えるべき存在として、J氏は認識しており、J氏の父親も了承しているとのことであった。そのため、J氏が来所できないときは、他の男性メンバーに「今日は来られないから、任せておく」と申し送りをする。今後、J氏は魚を釣ってメンバーや支援者と一緒に食べることや、地域のバスケット、清掃活動、クリスマス会を通して、さらにメンバーや地域住民と共に楽しみたいと笑顔で答えてくれた。

3.4. 事例2）ある時は支えられ、ある時は支える当事者M氏

M氏は重度の知的障害と肢体不自由および言語障害を呈しているため、動作が緩慢であり、移動に時間を要する。施設へ一人で来ることができず、往

写真2. メンバーの助けで三輪自転車に乗るＭ氏

路は母親と、復路は妹と移動する。自宅から片道2時間と遠方にあるため、週に2度のみ通っている。Ｍ氏が到着すると、机上の学習課題に取り掛かるが、分からない箇所が出てきたときにはＣ氏やＲ氏といった他のメンバーに教えてもらうことが多い。Ｍ氏はトランプなどのカードゲームといった知的要素を含む遊びはスムーズに行えず、Ｊ氏やＡ氏にこっそりと教えてもらい、ゲームに参加する。悪路を通って海水浴に行く際には、Ｍ氏はスムーズに歩くことができないため、Ｊ氏をはじめ他のメンバーが漕ぐ三輪自転車に乗り移動をする（写真2）。また、地域の祭りがあった際には、Ｍ氏も一緒に招待された。その経緯として、まず近隣に住む婦人が施設の販売活動やイベントの参加を通して支援者やＪ氏らと親しくなり、その後にＭ氏を知った。現在では、地域の祭りがあるときには、Ｍ氏は地域住民から名前を呼んでもらい、食事を招待され、歩行のサポートもしてもらうことも多い。

では、Ｍ氏は支えられるだけの存在なのだろうか。メンバーが調理している際には、Ｍ氏が食事前にテーブルを拭くといった活動を行っている。また、物品販売活動では、言語障害のため積極的に店番をする頻度は少ないが、衣類を畳んだり、数を数えたり、品物を並べたり、釣銭の管理を行ったりと可能な範囲で活動に参加する。このように、Ｍ氏はメンバーの活動がスムーズにいくように、Ｍ氏なりにメンバーを支えていると言える。また、自宅でもテーブルを拭き、洗濯物を畳むといった家事動作を行えつつあり、家族の手助けを行うなどの行動の変容もあった。

しかし、2019年に父が脳卒中になり、母が父とＭ氏の介護を行うようになり、母の負担が増大した。結果、Ｍ氏は公共交通機関を一人で利用できないために、来所頻度が激減した。Ｍ氏は母親の前で何度も泣き、さらに支援者やメンバーに電話し続け、ハウスに行けないことを残念がった。そこで、Ｍ

氏と母親と支援者が話し合い、母親の負担軽減とM氏の来所希望を実現するために、週に一度宿泊することになった。現在、M氏は施設内通貨（バビタハウス券）を貯め、母にアクセサリーやバッグを購入し、母を笑顔で支えることもある。

3.5. 事例3）新しい役割を見つけた当事者A氏

軽度から中等度の知的障害を呈しているA氏は、ハウスへ来所する以前は自宅を中心とした狭い生活圏内で家事を日課に行っていた。手先が器用で仕事に興味があるA氏はハウスに来るようになってからは、物作りをはじめ生産的な活動や施設の設備維持活動、物品販売活動を好んで行い、バビタハウス券を貯めることに励んでいる。

例えば、物作りでは、ミニチュア細工の図面を何度も厚紙に描き、型紙を作成した。その結果、J氏やA氏のみが行えていた活動は重度の知的障害を呈しているM氏も参加できるようになった。また、施設の手伝いも積極的に行う。例えば、施設の飲み水がなくなった際には、5ガロンのボトルを4本、三輪自転車に括り付け、約10分離れた商店に買いにいく。A氏は親友のC氏と施設のパンクした自転車を見つけ出しては、2人で協業して簡単に修繕も行う。こういった活動を通して、A氏はバビタハウス券を貯めて、自分への報酬として工作の本を買い、嬉しそうに眺める。

しかし、2017年にA氏は1年間の出入り禁止になったことがある。J氏の誕生日で大勢の地域住民がハウスに来ているとき、ハウスの三輪自転車の使用をめぐって、A氏はR氏と口論になった。元来、A氏は頑固な性格であり譲らず、両者の話し合いが激化し、J氏がなだめるもA氏は怒りを抑えることができず、ハウスの空き室へ鍵をかけ一晩閉じこもった。参加していた地域住民も戸惑いが生じ、A氏の言動は社会で容認できる範疇を超えたと支援者が判断した。結果、A氏は1年間の施設出入り禁止となった。この間、A氏は何度も来所してメンバーと共に活動することを希望したが、反省する期間として支援者に諭された。その後、A氏と家族と支援者が話し合い、ルールを遵守することを条件に復帰になった。筆者がA氏にこの件について尋ねると、「もう反省した、他のメンバーとも仲良くやれる、新しいメンバーが来ても大丈夫」と苦笑

写真3. 販売活動を行うR氏とA氏

いしながら、当時のことを振り返る。

2019年に入ると、A氏の活動の範囲はさらに拡大していった。ハウスの一角を地域の子ども向けに遊び場として開放しており、A氏は子供たちと遊びながら面倒を毎日見ている。また、2019年3月、筆者がA氏に取り組みたい活動を尋ねた際、A氏は路上で衣類の販売を一人でしたいと希望した。A氏はハウス内で販売活動を行えるものの、計算が苦手なため一人では行えていなかった（写真3）。2019年7月から、A氏が自ら地域住民に向けて、路地で商売を始めている。そのプロセスとして、支援者とA氏が計算表を作成し、合計額や釣銭の計算が簡易化された。施設から約200m離れた路地まで売れそうな約50着の服をA氏は持っていく。お釣り等で困ったことがあると、いつでもハウスに戻れるようになっている。地域住民も協力的であり、A氏が一人で行っている路上販売の様子を適宜、支援者に伝えてくれている。売り上げ差額はA氏の小遣いになるため、今後はA氏自身で売れそうな服の選定や額面設定も行っていく予定である。

4. バビタハウスという小さな拠り所の価値

4.1. いつでも集まれる居場所

メンバーにとって、ハウスとはどのような位置づけなのだろうか。ハウスにはメンバーと支援者がいて、自宅とは異なり多彩な活動が行える。さらに、メンバーは好きな時にハウスに来ても良いという点が挙げられる。こういった土壌の中で、メンバーは他者からの強制や要求をされることなく、支援者を助けたい、メンバーに会いに来た、面白そうな活動があるからという気持ちで来所してくる。こういった場所を、オルデンバーグ（2013）が提唱するサードプレイスとしてとらえることもできる。ファーストプレイスは自宅、セカ

ンドプレイスは職場、サードプレイスは創造的な交流が生まれる非公式な場所とある。ハウスはサードプレイスとして、共通の活動の中で日常の出来事を話し、メンバーや支援者に対して、過度の不安や緊張感を持たずに、安心できる時間を共有できる場所になっているのである。「ハウスは家でもなければ、職場でもない、ハブ空港のような場所。メンバーが思い思いの動機を持ってくる。だから、メンバーの発着場になっている」と支援者は表現する。共通の仲間と共に共通の時間を過ごす共通の場所を拠点にしながら、安心感を保障され多彩な活動を自宅から離れた地域コミュニティで取り組むこうした事が、ソーシャル・インクルージョンの一歩になるのではないだろうか。

4.2. 活動の中で変容する役割

ハウス内の同じ活動でも、メンバーの役割は常に流動的である。例えば、工作を行う際、J氏が活動を始めると周りも行う、A氏が手先の器用さを活かして工作で図面を引く、M氏は糊付けされた部分をゆっくりと押さえ、力のあるC氏が重たいものを運ぶ、R氏が冗談を言って周りを和ます。工作に限らず調理や農業などを行う際は農村部という不自由な環境ゆえに作業活動が増え、必然的に手分けし、協力することになる。こういった同一の作業活動に見えても多様な役割がある。他のメンバーと様々な作業活動を体験することは自分の能力や限界を知る機会になる。それでも、協力すれば達成できる課題に向かっていく中で、時には障害のため重要な役割を担うことができなくとも、他者に受け入れられた体験を積み重ねていくことが重要と考える。

また、重度の知的障害を呈しているM氏は他のメンバーに学習課題や屋外歩行などを助けてもらっていることが多い。しかし、とらえ方を変えると、他のメンバーに役割を提供しているとも言える。他のメンバーはM氏の活動を支えるという役割が新たに生まれ、相互作用ができる。他方、M氏が食事前に机を拭くことや物品販売前に品物を出すことや数えることによって、他のメンバーを支えていると言える。そこには、「知的障害者」や「ケース」という利用者という枠組みから離れ、ハウスを盛り上げる「共同運営者」としての当事者がいるのである。

4.3. バビタハウスという居場所から地域コミュニティへ

ハブ空港と表現されるハウスを拠点に活動をしているメンバーが地域住民と交流することについて、考察をしていきたい。まず、支援者が主体となり、ハウスの開所式イベントや物品販売、果物などの物々交換を通して、地域住民との関係性を作っていく。次に、物怖じせずに誰とでも分け隔てなく笑顔で活動できるJ氏やR氏といった活発的なメンバーが、地域住民とスポーツやトランプゲーム、酒を飲むといった活動を地域住民と共にするようになる。徐々に、A氏やM氏といった大人しいメンバーもJ氏らが作った地域住民との関係性の中に入り、行動を一緒に行っていく。そして、地域の祭りや地域住民の冠婚葬祭が行われる際には、地域住民が全メンバーに声をかけるようになってくる。このように、支援者から積極的なメンバーへ、積極的なメンバー

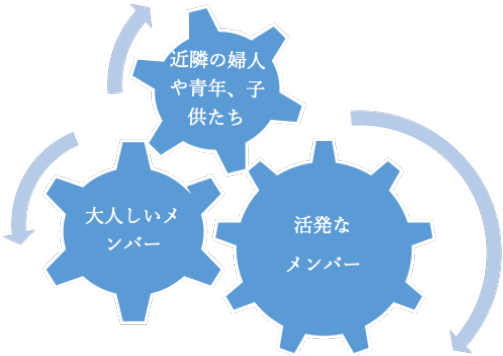

図　メンバーと地域住民の関係性

から他のメンバーへと参加者の輪が拡大し、地域コミュニティでの活動が自由な広がりを見せていくのである（図）。

その具体的事例がA氏である。A氏の物品販売活動はもともとハウス内に留まっていたが、J氏のように一人で路上で服を売り捌きたいと希望するようになった。つまり、モデルとなったJ氏、ハウス内の販売でできた顔なじみの地域住民、失敗しても戻って来られるハウスの存在がA氏の一人路上販売を行うという意欲の変容につながったのである。

日本を始め先進国の一般的な知的障害者の施設のイメージでは、依然として支援者が中心となったプログラムが行われており、知的障害者の生活は施設で完結されることが多く、外部との接点は限られていると言える。そのため、近年着目されているソーシャル・インクルージョンの理念は確立しつつあるものの、具体的な実践の集積は今後も重要である。

まとめとして、本稿の事例では、社会保障制度が限られた地域でも、弱さを持った当事者たちが地域コミュニティの構成員となっていた。当事者、家族、支援者、地域住民との支え合いの中で、当事者は新たな発想や活動の可能性を見出していることに着目することが肝要であった。また、「障害は人間関係の希薄さによって顕在化する」とハウスの支援者は述べている。つまり、ソーシャル・インクルージョンを考えるうえで、当事者は地域コミュニティの受動的な構成員に留まらず、自発的な構成員へと移り変わっていくことが重要になると筆者は考える。

なお、本研究において、メンバーにとって施設周辺が主な活動拠点となっていた。当初、顔見知りではなかった地域住民は、メンバーの特性や能力の差異を徐々に認め、障害者であることを意識している様子はないように筆者は伺えた。つまり、ハウス周辺での活動はメンバーにとって「守られた環境」になりつつあったのではないだろうか。今後、メンバーがハウスを基盤としない地域活動へと広がりをみせていくことが、さらに重要になっていくと思われる。そのためにも、メンバーを含む地域住民が抱える課題やニーズについて、さらに調査し分析していきたい。

5. おわりに

ハウスを拠点に地域で活動する成人の知的障害者は「当たり前」の生活を営んでいたことが、筆者にとって「驚き」の連続であった。メンバーは日々の出来事を冗談交じりで話すこともあれば、ケンカすることもある。また、地域住民とスポーツを楽しむこともあれば、地元の祭りに参加し一緒にお酒を飲むといった30歳代であれば、誰しもが経験する活動をしていた。そして、前述した「主体的な」医療福祉従事者の弊害で生まれる消極的かつ依存的な障害

者はハウス内にはいなかった。確かに、フィリピンの農村部では社会資源が限られている。しかし、メンバーがハウスという安心できる場所で、安心できる仲間と、安心できる時間と経験を共有しながら、地域住民と繋がることができる地域コミュニティがあった。そして、そこには知的障害者の社会参加を変容する可能性が秘められており、新たな支援のあり方を再確認した。

参照文献

田中治和
2004 「社会福祉学対象論の基本問題」『東北福祉大学研究紀要』28: 27–40。

浜村明徳
2014 「ソーシャル・インクルージョンの観点から地域包括ケアシステム」『クリニカルリハビリテーション』23(1): 25-32。

松井二郎
1977 「ソーシャル・ワーカー論 哲学的基盤を求めて」『北星論集』15: 15-38。

向谷地生良
2006 『べてるの家から吹く風』いのちのことば社。

森壮也
2010 「フィリピンにおける法と障害者 – 法の実施の実態から」『アジ研ワールド・トレンド』181: 20-23。

オルデンバーグ，レイ
2013 『サードプレイス―― コミュニティの核になる「とびきり居心地よい場所」』忠平美幸訳、みすず書房。

国際協力機構
2015「課題別指針（障害と開発）」https://www.jica.go.jp/activities/issues/social_sec/ku57pq00002cyac5-att/guideline_handicap_development.pdf（2019/12/18アクセス）

World Health Organization
2011「World report on disability」http://www.who.int/disabilities/world_report/2011/en/index.html（2019/12/18アクセス）

RESEARCH ARTICLE

Place and Local Community for People with Intellectual Disability : A Case Study in Rural Philippines

Akira TERAMURA

Abstract

This article describes the diverse activities of adults with intellectual disabilities who visit Babita House in rural Philippines, where there are limited number of specialists, underdeveloped public system and strict social resources. In particular, I consider social inclusion based on interactions among the members, the local residents, and the supporters. The main principle of this facility is (1) to create a place for the members, (2) the members as co-operators, and (3) to bridge local communities. It is frequently used by five people with intellectual disabilities aged around thirties. The main activities include cooking, washing, cleaning, learning educational tasks, farming, caring livestock, participating in local sports competitions, selling goods, and hosting events with the local residents. As a result of fieldwork, (1) it is a facility where the members can work on activities with common members and common time at a common place with confidence. (2) In the facility, the supporter does not excessively intervene, and the members develop activities while supporting each other. (3) In the relationship with the members and the local residents, the members have new ideas. Moreover, the members are involved in the local community and their activities are expanding. The supporter of Babita House mentions that "disability becomes obvious, when human relationships become weaker." In considering social inclusion, it is important to focus on the shift from passive members of the local community to active members.

Keywords : Philippines, People with Intellectual Disabilities, Local Community, Social Inclusion